

明治後期の『学燈』にみる丸善

加藤 葵

本研究は、丸善の出版社 PR 誌『学燈』にて広告された出版物及び掲載記事の分析を通して、明治後期における丸善の活動について考察した。

丸善とは、1869（明治 2）年に福沢諭吉の門下である早矢仕有的が創立した、丸屋商社を前身とする洋書輸入業を主軸とした株式会社である。有的が、国内での書籍等輸入事業の重要性を認識した福沢諭吉の考えを引き継いだことが創立理由であり、丸善は、一企業でありながら、近代国家成立を目指す明治新政府が推し進める西洋文明の積極的導入の一端を、書籍の輸入によって担おうとしていた。このような丸善が、経営を改善させ、書籍の輸入及び出版を社内外の重要事業として再確認した明治 30 年代において、PR 誌『学燈』を通じてどのような活動を行っていたかを明らかにする。

本研究の対象となる『学燈』は、「自身が燈となって学びの道を照らすこと」を目的として 1897（明治 30）年に丸善が発行した月刊雑誌である。1902（明治 35）年に『学燈』、1903（明治 36）年に『学燈』と改題したが、関東大震災と太平洋戦争による 2 度の休刊期を除き、今日に至るまで発行され続けている。執筆者には坪内逍遙、戸川残花、志賀重昂、森鷗外、井上哲次郎、夏目漱石など当時各分野で活躍した人物が連なっている。

これまでの丸善の研究には、『学燈』を資料とし、同誌の性格の変遷や書籍と男性の関係について研究したものがある。しかし、これらの研究では、出版物広告について触れられておらず、明治 30 年代の丸善の出版事業について分析的考察が行われたものはない。

そこで本研究では、1897（明治 30）年から 1906（明治 39）年に刊行された『学燈』第 1 巻 1 号から第 10 巻 12 号（全 115 号）に掲載された出版物広告と論説、雑録などの記事から、当時丸善が宣伝していた書籍の分野及び数と、掲載記事の内容について分析を行った。

その結果、特に掲載されていた書籍の分野は、和書の場合、他国についての知識を深めることを目的とした「地理・地誌・紀行」であるのに対し、洋書は「政治・経済及び社会学」であった。また、1897（明治 30）年から 1901（明治 34）年頃までは、多くの書籍広告を掲載することを重視していたが、1901（明治 34）年頃以降には、書籍の重要性を説く記事や、読書方法・必読本などの紹介記事を掲載することで、読書自体の重要性を読者に説く方向への転換が見られた。加えて、学生や教員に向けた、勉学の為の紀行や旅、時流に流されない姿勢や勉強方法など教育に関する記事を多く掲載していた。

丸善の『学燈』は、学びを求める人々に対し、勉学の姿勢及び方法を教え、各専門分野の知識や新しい考えを教え、そして読書の重要性を説きつつ学びの材料となる書籍を教示していた。同誌副題に「The Light of Knowledge」とあるように、その啓蒙（enlightenment）的性格を本研究では実証的に示すことができたと考える。

（指導教員 原 淳之）